

ムーブ叢書 ジェンダー白書8 ポップカルチャーとジェンダー



■ 北九州市立  
男女共同参画センター 編  
■ 明石書店  
■ 2012年初版  
■ 1,500円(税別)

90年代以降、日本のドラマやアニメは国境を越えて、世界へと広がっていった。フランスやシンガポール、タイや韓国の大学生たちは同じようにハローキティや宮崎アニメに親しんで育ち、同時代の若者文化を共有するようになった。日本のポップカルチャーは「少女マンガ」や「少年マンガ」とジャンル分けされるように、そこには「女らしさ」「男らしさ」に基づいたジェンダー秩序の再生産が見られる。文化に埋め込まれたジェンダー差異の中で、日本政府はロリータファッションをポップカルチャー大使として位置づけ「若く」「かわいい」人形のような女性像が輸出され、消費されてきた。そこには成熟した大人の男女のイメージは不在である。

本書は、消費のみならず文化生産の主体としての女性に着目し、近年のポップカルチャーにはジェンダー秩序が溶解するような表象が見られることを指摘する。例えば、少年マンガを読んで育った女性マンガ家世代が少年をキャラクターにした作品を創るようになったり、ポケモンが男女双方に人気を博したり、ジェンダーによる境界を相対化する動きが見られる。低成長時代に入り、高度経済成長期に形成された男性稼ぎ手モデルが揺らぐ中、若い世代が既存

の価値観をゆるがし、ジェンダー平等に根差した新たな文化創造の担い手となることに期待したい。

韓流前史

日本では韓流上陸以降のドラマやK-POPが一般的に知られているが、韓国では若者が主体となった文化運動が70～80年代の民主化運動の中で大きな役割を果たしてきた。この動きは大学生が中心となり、伝統的に農村で行われてきた仮面劇や伝統音楽などを再生させ、独裁政権に対する批判と風刺に満ちた内容に読み替えることによって、各地で上演してきた。90年代以降、韓国の経済成長と共に韓流は一大産業となったが、市民が文化の担い手であった時代のカウンターカルチャーは、市井の人々の自己表現とアイデンティティの表出にあふれている。

ポップカルチャーは大衆性と時代性を有し、ジェンダーの再生産装置として機能すると同時に変革する力をも持つ。本書においてキムが指摘するのは、韓流は若者が主体的に自己表現した若者文化ではなく、「文化産業によって計算され作られた文化商品」であるという点である。資本の欲望と交渉しつつ、私たちはどのようにして文化の消費のみならず、よりジェンダー平等な文化の創造に関わることが出来るのか、韓国から学ぶことは多い。

おがわ れいこ  
小川 玲子 (九州大学法学部准教授)

「働くこと」とジェンダー — ビジネスの変容とキャリアの創造



■ 金谷千恵子 著  
■ 明石書店  
■ 2011年初版  
■ 2,200円(税別)

労働ジェンダー初心者にとっては、テキストブックの体裁の通りに、働くことの実態を広く考えさせられる好著である。ただし、200頁に18項目を詰め込んでいるのだ。各論の詳細をうんぬんするのはやめにして、働き方の記述に関して、あえて2点だけ。

第1に、パート、派遣、NPO、起業などの議論に比重があり、現実性のある選択論が展開されている。だが、随所に女性に挑戦と勇気と変化を期待しているわりには、男性企業社会で競争する女性が不在である。サブタイトルから、勝手にキャリア型女性の実像を期待する読者にとっては物足りない。

第2に、労働組合の役割は労働基準法を守らせるとか、問題を訴えてくる者への対応など、目立たないけれど、決して本書のいうほど無力ではない。組合の衰退を放置せずハッパをかけたか、組合活動にもジェンダー視点を持ち込んだ方がよい。

本書は、何がしかを強く推奨するわけでもない態度が、結局は多くの論点を突きつけている点に意義がある。メッセージをつなぐ文章を見つけた。

「男性たちは、職場でも家でも幾重にも下駄を履かされて生きてきたことを認めなければならない。男性はより実像に近い生き方を要求されはじめているにすぎない。」

年収130万円の壁

年収130万円を超えない限り、主婦パートは配偶者の扶養に入ることで年金保険料を負担せずに満額受給できる。このため、働きすぎないよう就業調整しがちになる。こうした現行年金制度は女性にとって問題が多い。職場での戦力に見合わない低賃金に抑制され、夫の扶養枠から抜け出すことができない。また、自立した厚生年金を欲する意見は封じられ、年金受給ただ乗りという状況に留め置かれる。

政府が厚生年金の適用範囲拡大を強力に進める一方で、産業側は、パート本人たちが反対しているとか、パート雇用を縮減させるなどの理由で猛反発している。

ほんだ かずなり  
本田 一成

(國學院大學経済学部教授/同大学労供研究会事務局長)

ひとはなぜ乳房を求めるのか — 危機の時代のジェンダー表象



■ 山崎明子、黒田加奈子、池川玲子、新保淳乃、千葉慶 著  
■ 青弓社  
■ 2011年初版  
■ 1,600円(税別)

人間は2足歩行を始めたことで、女性の場合正面にある乳房が目立つようになり、それが強調されて表現されてきた。マンガやアニメ、ゲームのキャラなどで性の差異を表わしたければ、胸を出っ張らせて描けば、顔は同じでも男性から女性に早変わりする。女性の乳房は「女性であること」を示す「お約束」なのだ。

今や乳房は性差のアイコンでありアイテムとなってしまったかのようだが、乳房が豊穡、母性、セクシュアリティ、発情装置、癒しなどの表象として表現されてきたのは、実は埴輪の時代から変わりが無い。性差の「お約束」が成立するのは、男性が(そして女性も)、女性の乳房をそのようなまなざしでみてきたからに他ならず、まなざしを向けられる乳房の側もまたそのように振る舞ってきた(振る舞うように仕向けられてきた)からである。ここに、「(表象としての)乳房の政治学」が成立する。

読者は、乳房をめぐる医学的差異の言説、ピンクリボンキャンペーンにみる「女性の美」への威嚇、日本

の戦争映画にみる「授乳」イメージ、ヨーロッパのベスト絵画に描かれた乳房とキリスト教的都市秩序、男性の危機とポルノ映画の乳房の露出や陵辱表現などの各論考を通じて、「お約束」としてのジェンダー秩序を揺るがされるだろう。

表象

対象となる外界を知覚し、認識し、記憶したりしたのち、直感的・心的に思い浮かべられる「表現された象徴」のこと。そもそも私たちはこの世界に存在する事物(モノ・コト・ヒトなど)を、まるごと把握することはできない。何かしらの意味をもったイメージ的なものとしてとらえ、脳で再現している。その際、外界の対象である事物には、意図的/無意図的に、「意味」が包含され、「意味」を包含している。たとえばテレビCMでエプロンをした女性が台所の前に立ち指先でシンクに触れているシーンは、女性は家事をし、その居場所はキッチンであり、控えめな存在である(べき)ことを「表象」している。

もろはし たいき  
諸橋 泰樹 (フェリス学院大学文学部教授)

高校の「女性」校長が少ないのはなぜか — 都道府県別分析と女性校長インタビューから探る



■ 河野銀子、松村泰子 編著  
■ 学文社  
■ 2011年初版  
■ 2,300円(税別)

「女性」校長の誕生から、今にいたる現状を国別データの比較から読み解いていったものが第1部である。日本において、最初の女性校長は家庭科の教員であったということは、高校教員として主に女性に門戸が開かれていたのは「家庭」と関わりのある教科ということでもある。

特に興味を引くのは、第2部における現職・退職「女性」校長のインタビューから見えてくる管理職像である。彼女らのメンターが男性で、男性をロールモデルとして管理職を目指す女性教員も少なからずいるなか、「女性」校長には、ひたすら管理職を目指してたどりついた男性校長には見えにくい「teachingの延長線上にmanagementがある」という視点がある。一教諭として生徒とかかわることで、長年にわたって培われたコミュニケーション能力。それが管理職として教員を包摂して束ねることに役立つという認識は、管理職という職務が教員を単にcontrolすることではなく、社会の変容とともに多様化する生徒およびその家庭環境に対処しなければならない教員をいかにうまくmanagementするかにつながる。この認識の共有

こそがグローバル化が急速に進展し、家族や価値観が多様化するなか、教育の分野に求められる喫緊の課題でもあろう。

男女共同参画社会の理念から程遠い「現実」が縮小された社会が公立高校といえるのかもしれない。ガラスの天井にひびを入れ、小さな穴をあけた先輩「女性」校長たちが、女性教師たちに、生徒の一ロールモデルとなり、男性校長たちにはみえない視点で後に続けとエールを送る啓発の書、とも読める。

女性校長

日本の2010年度における女性教員率は、小学校63.1%、中学校42.3%、高等学校30.1%である。女性校長の比率はそれぞれ18.1%、5.3%、4.8%と、学校段階の上昇とともに女性教員の比率と同様に下降している。初等教育と中等教育レベルにおいて女性校長の割合に大きな差が見られないのは、ジェンダーギャップ指数の上位国である北欧の国である。日本においては、ジェンダー平等の理念が教育政策として徹底される必要がある。

ふじまつ きさこ  
藤松 幸子 (福岡県立田川高等学校教諭)